北海道高等学校教頭・副校長会定通部会

平成26年3月1日(土)発行

会　報

事　務　局
北海道札幌南高等学校
〒064-8611
札幌市中央区南18条西6丁目1-1
TEL　011-521-2311
FAX　011-521-2316

巻　頭　言

「教育新時代に対応した定通教育の創造」

北海道高等学校教頭・副校長会定通部会長
北海道有朋高等学校通信制課程副校長　田　中　光　彦

北海道高等学校教頭・副校長会定通部会会員の皆様には、日頃より本部会の運営・諸事業の推進にご理解とご協力をいただき深く感謝申し上げますとともに、北海道教育委員会、北海道高等学校長協会定通部会をはじめ関係機関には、多大なるご支援を賜り、心よりお礼申し上げます。

さて、全国高等学校定時制通信制教頭・副校長協会では、全体テーマを「教育新時代に対応した定通教育の創造」とし、①多様化した生徒に応じた定通教育の改善と充実、②勤労青少年の修学条件の改善及び就学の促進、③教職員の定数及び待遇の改善、④組織及び事業の充実と活性化、以上の４点を事業目標に掲げ各種事業に取り組んでいるところです。さらに、昨年度から、「学校安全の推進とその課題」を新たに研究課題に加え、調査・研究を進めてきております。これは、東日本大震災により、直接の被災だけでなく放射能汚染の問題や計画停電の問題等が、定時制・通信制高校にも少なからず影響を及ぼしているからです。とりわけ、防災マニュアルや地域との連携の見直しについては、定時制・通信制高校にとって喫緊の課題となっています。今年度の調査分析は、千葉県高等学校教頭・副校長教会定通運営部会によりとりまとめられました。防災について、「自分の命は自分で守る」ために災害に対応できる力、そして、高い危機管理意識の醸成が課題として提言されました。道内の定時制・通信制高校においても、防災対策見直しの際に、参考となる提言と受け止めております。道定通部会調査研究部においても、今年度は、「防災避難設備と防災避難訓練の現状について」をテーマとしたアンケート調査を実施し、防災業務の改善に取り組んできました。今後さらに、会員の皆様のご協力により、実効性の高い防災業務の構築に尽力して参りたいと思います。

また、生徒を取り巻く環境は一層複雑化し、教育と福祉の連携がますます重要になっております。今後さらに、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等の専門家、児童相談所等の関係機関との実効性のある連携を進めるとともに、弾力的な教育課程の実施が望まれるところです。

結びになりますが、定通教育は、北海道における生涯学習の一翼を担っております。その大きな役割を果たすためにも、本部会は、会員相互のネットワークを駆使し、ますます創造にあふれた定通教育を実践していく所存ですので、会員の皆様のご理解・ご協力をお願いするとともに、皆様のご健勝と更なるご活躍を祈念いたします。

「定通教育の現状と課題について」

北海道高等学校長協会定通部会長　村田尋如
北海道有朋高等学校長

教頭・副校長会定通部会の各教頭・副校長の皆さまにおかれましては、日ごろより、北海道における定時制通信制教育の中心としてご尽力をいただいておりますことに、厚くお礼を申し上げます。

皆さますでにご承知のとおり、定通教育については、戦後、就業等のために全日制高校に進学できない青年に、後期中等教育の機会を提供するものとして制度化され、積極的な取組を続けてきました。その甲斐あって、定通教育は大きな成果を上げ、期待される役割を着実に果たしてきたという高い評価がある一方、近年は、経済社会の変化や少子化の進行等に伴い、働きながら学ぶ勤労青年の数が急激に減少する中、全日制課程からの進路変更等に伴う中退経験者などの編入学や、不登校経験者の転入学、さらには過去に高校教育を受ける機会がなかった者の入学など、様々な入学動機や学習歴を持つ者が多くなっており、制度発足当初とは著しく異なった様相を呈し、いわゆる「多様化」、「複雑化」が一層の深まりを見せている感があります。

そうした状況を踏まえるとき、定通教育には、従来からの勤労青年のための教育機関としての役割のほか、多様な学びのニーズへの受け皿としての役割が強く期待されているのではないでしょうか。とりわけ、自分のペースで学べる定通教育には、中途退学者や不登校経験者等への学び直しの機会の提供など、困難を抱える生徒の自立支援等の面でも大きな期待が寄せられていると考えております。

国の中教審の高校部会においても、現在、困難を抱える生徒等のための支援・相談の充実を柱に、学び直しの支援や、学校外の相談・支援機関との連携の促進、スクールカウンセラー等の専門スタッフによる相談や支援へのアクセスの充実、教員の資質・能力の向上などについて議論されていると承知しております。

私ども現場を預かる者としては、こうした議論等を注視しながら、変化への対応、課題解決の方向性などについて理解を深め、必要なことを率先して実践していくことが必要だと考えていますので、学校においては、そうした観点に立って、校長のリーダーシップのもと、教頭・副校長の皆さまとスクラムを組んで、今できること、しなければいけないことを整理し、学校毎に抱えている課題に真摯に立ち向かい、学ぶ意欲のある生徒のために、全力を挙げて教育活動の充実に取り組んでいくことが大切であると考えております。

教頭・副校長会定通部会の皆さまにおかれましては、こうした状況を積極的にご理解いただき、今後とも、生徒のため、定通教育の振興にお力添えをいただけますよう、心からお願い申し上げます。

平成２５年度第６４回全国高等学校定時制通信制教頭・副校長協会教育研究協議会千葉大会　報告

北海道高等学校教頭副校長会定通部会事務局長
北海道札幌南高等学校　教頭　北　村　京　一

日頃より当事務局にご理解とご協力をいただき心よりお礼申し上げます。これまで年次計画をほぼ当初の予定どおりに遂行できましたのも会員各位のご支援のたまものと感謝申し上げます。

さて、標記大会について次のとおり報告します。

□期　日　平成２５年 7月25日(木)～7月26日(金)
□会　場　千葉市
□参加者　２１７名（北海道支部より代表４名）

◆全国理事会・総会

主催者を代表して山西和夫全国定時制通信制教頭・副校長協会理事長（東京都立桜町高等学校副校長）より、開催支部を代表して田中薫千葉大会実行委員長（習志野市立習志野高等学校副校長）より、挨拶があった。来賓として濱名言實（財）石沢奨学会事務局長から挨拶があり、議事の後、顧問・名誉会員へ表彰状・感謝状が贈呈された。

◆開会式

西尾暁文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課教育制度改革室専門官、宮本淳子厚生労働省職業能力開発局育成支援課キャリア形成支援室室長補佐、徳重隆（財）全国高等学校定通教育振興会事務局長、長山晃一全国定時制通信制高等学校長会理事長、森慎二全国高等学校通信制教育研究会会長、瀧本寛千葉県教育委員会教育長より祝辞があった。

◆講演

「南極で知った地球環境～教育に生かしたいこと～」と題して、『楽しい気象観測図鑑』『世界一空が美しい大陸　南極の図鑑』『雲と暮らす。』の著者、武田康男氏による講演があった。

◆研究協議会・分科会

◇第１分科会＜教育課程＞

「義務教育内容の定着を図るための指導の実態と展望」静岡県立藤枝東高等学校、「キャリア教育と総合的な学習の時間」高知県立室戸高等学校

◇第２分科会＜生徒指導＞

「長野県の定時制高等学校全体及び池田工業高等学校定時制の現状と課題」長野県池田工業高等学校、「体験学習をとおしての生徒指導」奈良県立山辺高等学校山添分校、「本校の生徒指導における現状と課題」鹿児島県立奄美高等学校

◇第３分科会＜管理運営＞

「定時制高校における災害時の初動態勢の構築」東京都立東久留米、八王子拓真、砂川高等学校、「昼間定時制課程における学校経営―あるべき姿を求めて」広島県立広島観音高等学校

◇第４分科会＜教育制度・単位制＞

「三部制高校としての現状と課題」北海道有朋高等学校、「本校の現状と課題解決に向けて―生徒を学習に向かせる方策を求めて」福島県立郡山萌世高等学校

◇第５分科会＜通信教育＞

「通信教育の目指すもの―ひとりじゃないんだがんばろう―」愛媛県立松山東高等学校、「併修制度を活用した通信制課程の取組みについて～自分の選んだ学校を母校にするために～」北海道有朋高等学校

◆研究協議会・全体会

各分科会の報告者が各研究発表と協議内容について報告し、各助言者が全体講評を行った。

◆閉会式

大澤次郎千葉大会副実行委員長（千葉県立千葉工業高等学校副校長）の開式の辞の後、山西理事長の挨拶があり、次期開催地の四国支部より梅原俊男代表（高知県立高知工業高等学校教頭）が高知大会の準備状況を報告して、全日程が終了した。

本支部を代表して研究発表を担当された北海道有朋高等学校 田中光彦副校長、元村教頭には、心から感謝申し上げたい。

全国単位制高等学校長等連絡研究協議会参加報告

北海道有朋高等学校　校長　村田　尋如

全国単位制高等学校長等連絡協議会が、平成２４年１０月１０日(木)から２日間の日程で、大分県大分市で開催されました。

今回で24回目となる本研究協議会には、北海道からの３校３名を含めて全国各地から約１７０名の校長等が集まり、有意義な研究協議が行われました。

１　研究協議Ⅰ（全体会）

開会式直後の全体会では、「多様なニーズに応える単位制高校の在り方」をテーマに、パネルディスカッションが行われました。

その中で、大分県立中津東高校の高木校長から、「『主体的に学ぶ生徒の育成』を実現するための学校作りの実践－『師弟同行』」と題して、佐賀県立唐津東高校の白水校長から、「多様な学びができる全日制・単位制高校への挑戦～安心して学べる教育環境づくり～」と題して、兵庫県立阪神昆陽高等学校長兼兵庫県立阪神昆陽特別支援学校長の尾崎校長から、「社会におけるノーマライゼーションの理念を進展するための礎となる学校をめざして」と題して、それぞれ提言があり、それに基づいて、活発な意見交換が行われました。

２　研究協議Ⅱ（定時制通信制分科会）

「単位制高校における当面する諸課題とその対応」をテーマに、パネルディスカッションが行われました。その中で、神奈川県立厚木清南高校の森校長から、「３課程一体型単位制フレキシブルスクールの現状と課題」と題して、仙台市立仙台大志高校の大枝教頭から、「生徒一一人を支援する学校づくりをめざして」と題して、それぞれ提言があり、質疑応答を含めた熱心な協議が進められました。

３　研究協議Ⅲ（全体会）

分科会終了後、２つの分科会のコーディネーターから、協議内容の報告があり、参加者全員で協議内容を共有し、振り返りを行いました。

その後、文部科学省の長尾視学官から助言があり、単位制高校に期待することとして、「主体的に学習に取り組む態度」と「学び方を身に付けること」の観点を大事にした学力向上の考え方について示唆いただきました。

全国高等学校給食研究協議会理事会・総会報告

北海道札幌北高等学校　校長　中田　貢

全国高等学校給食研究協議会理事会・総会が、平成２５年８月１２日（月）に東京都学校給食会館で開催されました。

今年度は、隔年で開催される全国大会が行われない年に当たることから、理事会・総会のみが行われました。

１　理事会・総会

(1) 会長挨拶

平成２３年度に全国研究大会を単独開催とし隔年開催としたことから、２年間が過ぎてワンサイクルが終わった。

夜間定時制の減少と完全給食の減少から、加盟校も減り脱退する県も増えているが、給食の充実のために活動を進めたいと考えている。

(2) 今後の運営について

・ブロック代表者は①隔年実施の全国大会分科会の発表者と②機関誌「全国高校給食」への寄稿文掲載者を全国事務局まで報告する。

・次年度のブロック代表者は３月から５月末日までにブロック内の各都道府県代表者と協議し、次年度の副会長・常任理事候補を推薦し、５月末日までに全国事務局に報告する。

・平成２６年度は、８月４日(月)、５日(火)に東京都学校給食会館にて開催予定。

２　ブロック会議

北海道・宮城県・秋田県の出席により協議を行い、平成２６年度のブロック代表県（北海道・札幌琴似工業高校)、全国大会研究発表担当県（北海道・札幌琴似工業高校）及び平成２５年度機関誌執筆担当県（宮城県・気仙沼高校）の確認が行われました。

その後の情報交換では、宮城県が平成２６年度に脱退予定であること、山形県は２年間この会議には出席していないので来年度以降の加盟は不透明であることが報告されました。

３　講演

カルピス(株)発酵応用研究所統括マネージャーの前野正文氏から「乳酸菌の健康機能性について」という演題で講演をいただきました。

第64回全国高等学校定時制通信制教頭・副校長会教育研究協議会千葉大会参加報告
第５分科会研究発表
北海道有朋高等学校　副校長　田中　光彦

日　時　　平成２５年７月２６日（金）
会　場　　ホテルポートプラザちば
題　目　「併修制度を活用した通信制課程の取組みについて～自分の選んだ学校を母校にするために～ 」
発表者　　北海道有朋高等学校通信制課程副校長　　田　中　光　彦

１　はじめに

本校は長い間「働くものの学校」といわれ、「大人の学校」ともいわれてきた。生徒のなかに「働いている大人」の生徒が多かったからである。そのことを示す端的な例として、かつて本校には進路指導部という分掌がなかった。既に職を持っている生徒か、あるいは進路が決まっている生徒（連携生）なので、進路指導が必要なかったのである。有朋高校は、制度的にも本来の通信制高校の役割を果たしているだけでよかったのである。

しかし、現在は生徒の質的な変化にともない、そうもいっていられない状況が生じており、「有朋（通信制高校）のあり方」を模索する状態が続いている。まず、その生徒の変化について述べる。

２　生徒の質的変化について

高度経済成長期の1970年代（昭４６～昭５５）の特徴は、通信制の在籍者より技能連携校の在籍者の方が多かったことである。鉄道・看護・服飾・商工業等の技能連携校は多いときには１８を数えた。

【1970年代の技能連携校数の変遷】

年　度	４６	４７	４８	４９	５０	５１	５２	５３	５４	５５
連携校	１５	１７	１８	１８	１８	１１	１１	１１	１１	１１

その後通信制課程の入学者も徐々に増え、在籍6246名、内連携生3129名、一般生3117名であった1980年代（昭５６～平２）は在籍者が6000人をこえる年が続く。同時に入学者が1000人をこえる年も続く。８０年代に技能連携校は最終的に８校にまで減ったのだが、連携校の入学者数には大きな変化はなく、一般生よりも入学者が多い年もあった。すなわち、８０年代の最大の特徴は連携生が在籍の半数を占めていたことであり、在籍者の５割が所属する技能連携校を支えるという教育的役割が有朋高校にはあったのである。

【1980年代の入学者数の変遷】

年　度	５６	５７	５８	５９	６０	６１	６２	６３	元	２
一般生	808	536	543	482	581	573	545	547	670	1126
連携生	720	640	635	574	596	553	688	695	681	784
合　計	1528	1176	1178	1056	1177	1126	1233	1242	1351	1910

1990年代（平３～平１２）に入ると生徒の若年化が進んだ(無職生徒増)。平成３年度には単位制が設置され、象徴的な出来事としては、ついに校内に進路指導部も設置された（平成４年度、1992年)。進路指導を必要とする生徒が増えたということであろうか。

９０年代の特徴は、社会の変化とともに技能連携校が姿を消していき、それにともない、必然的に通信教育のみで学ぶ一般生の割合が増えていったのである。９０年代に入り技能連携校を支えるという役割は終わりを告げることになる。

2000年代（平１３～平２２）は、２０世紀末の平成１２年（2000年）に入学者が963名で1000名を切り、それ以降1000名をこえることはなく、減少に転じた。平成１４年には在籍者が6000人を切った。
この年以降6000人台を回復することはなかった。また、技能連携校は徐々に減っていき平成１７年に２校になり、連携生は327名まで減った。平成１８年には、ついに在籍者は5000人を切り、在籍4831名(一般生4538名、連携生293名）となった。

【平成１４年度以降の在籍者数の変遷】

年　度	１４	１５	１６	１７	１８	１９	２０	２１	２２	２３	２４	２５
在籍者	5986	5686	5366	5059	4831	4570	4435	4417	4376	4286	4242	4212

1990年代から2000年代をとおして進んだ若年化とともに、生徒の質的な変化も際立ってきた。まず、当然のことながら、有職者よりも無職者の割合が大きくなっていったのである。９０年代末の平成１１年の２０歳未満の生徒は58.7%を占め、２０歳以上の生徒を数の上では初めて逆転した。この傾向は以降も続き、もはや大人の学校とはいえなくなっている。

昨年度（２４年度)、４人の内３人は無職の生徒ということになるが、その多くは高校を中退した未成年者の生徒、心身に何らかの疾病を持つ生徒、様々な理由により不登校だった生徒である。新入学生に実施する健康調査によると、2000年代に入ってから今年度まで、何らかの精神的・身体的疾病がある、または通院治療中であると自己申告する生徒の割合は、常に５０%をこえている。そのほとんどが精神的疾患であり、重度の身体的疾患の生徒は数える程度である。

３　生徒の質的な変化に対応して（定通パワーアップ事業での研究に至る経過とその取組）

平成２１年度に、校内に「新生プロジェクト委員会」が設置された（２１～２３年度までの期間限定)。いわば、生徒の質的な変化に対して、正面から取り組もうというのである。この委員会のねらいは職員会議提案資料に次のように記されている。

> １　ねらい
> 有朋高校通信制課程においては、新校舎移転３年目を迎え、施設設備等の教育環境の整備が進む中で、次の段階として教育内容の充実・発展が課題となっている。その為、生徒一人一人の夢や希望を叶える教育活動の推進を図るとともに、本道で唯一の公立通信制課程としての存在感を発揮することをねらいとし、質の高い新たな教育活動を推進する。

このねらいの中の「本道で唯一の公立通信制課程としての存在感を発揮する」ために、２つの事業に取り組むことにした。

ひとつは、校内に「ICT活用委員会」を設置して各教科でコンテンツを作成し研究を進めていくことであった。

もうひとつは、「全通併修」の研究に取り組むことであった。本校は全道で唯一の通信制高校であり、そのことを考えたとき本校でなければ果たせない教育的役割が、全通併修だったのである。併修は通信制高校でなければ行えず、全道には本校しかないゆえに、全通併修を選んだ。併修のスタイルは個人併修と学校併修がある。今回の研究は個人併修についての研究に絞った。個人併修の方が柔軟に取り組めるからである。既に全通併修を実施している道外の高校に、新生プロジェクト委員会の委員を派遣し、研究を進めることとした。

個人併修であるから、併修のメリットはその生徒が最も多く受け取れるものであるが、その生徒が在籍する全日制高校にとってもメリットがある。それで副題を「自分の選んだ学校を母校にするために」とした。この言葉は、全通併修の目的を端的に表現しているからである。つまり、何らかの事情で単位未修得の生徒が、その科目を自分の学校で修得することが困難な時に、併修することによって本校で単位を修得し、それを自校の卒業単位として認定してもらうのである。私学の通信制高校では、すでに「自分の選んだ学校を母校にするために」個人併修を働きかけている高校もある。

４　１年目の取り組み（２３年度）

定通併修については、本校に併修を扱う専門分掌として技能連携部があり、長い間のノウハウの蓄積もある。しかし、全通併修については北海道に取扱要項がなく、かつて実施されたことがない。かくいう通信制高校である有朋においても、職員が全通併修について理解しているかとなると、疑問が残る。

道内のすべての全日制高等学校２３８校を対象に、副校長名で各校の副校長・教頭宛にアンケート調査を行った。回答１５４校（約６５%）であった。

【質問項目】
Ｑ１　在籍校の教育課程にない教科・科目の選択履修は、貴校生徒の学習機会の拡大に有効か。
Ｑ２　健康上の問題や不登校等による必履修科目の修得は、貴校生徒の学習機会の拡大に有効か。
Ｑ３　転・編入、その他の事由による不足単位数の補充は、貴校生徒が在籍校でそのまま卒業するという希望を叶えることに有効か。
Ｑ４　貴校でこのような取組を実施できる可能性はあるか。

このアンケート調査は、かなり有意義なものであったと思っている。各高校から忌憚のないご意見を沢山いただいた。本校が研究を進めていく上での方向性や、留意すべき事柄も見えてきたのである。なによりも、全通併修を実施できる可能性を持った学校が３９校あるということがわかり、それが最大の収穫であった。それで、まず本校が行おうとしていることのイメージ図を、他県の取り組みを基にしてつくり＜資料参照＞、具体的に共同研究の道を探ることにしたのである。

５　２年目の取り組み（２４年度）

前年度のアンケート調査の結果、併修を実施できる可能性のある高校が３９校あることがわかった。しかし、相手校を選定するのに、候補が３９校では多すぎるので、アンケートの全４問にすべて肯定的な回答をした１９校のなかから選定することにした。

それで、１校は本校の協力校の普通科のＡ高校。もう１校は総合学科の高校で、スクーリングに生徒が通うことを考えて協力校に比較的近いＢ高とした。いずれも、２５年度から研究を開始するための予備協議を行った。いずれの学校にも、共同研究開始のために職員会議等の校内手続きをクリアーしてくれるように依頼した。

その共同研究は、２５年度以降、実際に併修を実施できる高校と行う予定であった。研究し解決しなければならないテーマのほとんどは相手校にある。なぜならば、本校にとっては毎年の併修生が何人か増えるだけのことであり、その生徒が定時制の生徒か全日制の生徒か、という違いだけなのである。したがって、実際に併修を行う上で獲得しなければならないノウハウは、ほとんど相手校にあるといえる。そのノウハウは実際に併修を実施してみなければわからないことも多いであろう。

ここで、併修を実施しなければならない相手校が行わなければならないことがいくつかある。

（１）教務内規の変更
　履修と修得の分離、併修で得た単位を卒業認定単位と認める、併修許可単位数の決定、等をまず定めなければならない。

（２）併修生徒の生徒指導・学習指導方針の決定
　併修生は自校（相手校）にとって特別な生徒といえる。その生徒を励ましたり、学習の進捗状況を確認したりする指導計画や体制は必要である。

（３）学校間連携による全通併修のための協定書の締結
　全通併修の取扱要項がないため、単位の認定は学校間連携によるものとなる。相手校の準備が整い次第協定書を交わすことになる。

以上のことは、新しく起こさなければならないことと考える。特に「（２）併修生徒の生徒指導・学習指導方針の決定」は相手校のみのことであるので、両校に関わることは「（１）教務内規の変更、と（３）学校間連携による全通併修のための協定書の締結」の２項目となる。これで準備は整うことになるのであるが、この協定書を交わすまでに、例えば、相手校の研修会において本校の職員が併修制度の説明や、それを実施したときの考えられるメリットやデメリット、質疑応答等は必要である。

６　３年目の取り組み（２５年度）

今年度は、新たにパワーアップ事業の指定を受け、さらに全通併修の研究を進めることにした。研究テーマは「遠隔講義システムを活用した学校間連携の基礎研究」である。これは、全通併修を推進する上での面接方法の一つとして、有効な手段と考えている。その理由は、遠隔地における選択科目の拡大と面接講師不足の解消につながると考えるからである。また、本校は今年度から４年間、文部科学省指定研究開発事業の「遠隔授業システムを活用した授業や単位認定の在り方」について、研究協力校としての指定を受け、研究開発に協力することとしている。こうした状況の中、今年度は、共同研究の対象校を３校選び、課題を焦点化していく予定である。

７　おわりに

全通併修については、北海道において取扱要項ができるまで、まだ時間はかかるように思える。

それでも、「自分の選んだ学校を母校にするために」という視点を見失わなければ、学校の取り組みが、生徒にとってよい結果をもたらすのは自明のことであろう。この研究は、本校が道内唯一の公立通信制高校として、北海道の教育界における通信制高校としての新たな役割を模索する研究である。併修制度という観点から見ると本校にとって何ら目新しい活動ではないのであるが、全通併修という道が開かれた学校の生徒にとっては、必ずしや最良の結果を得ることのできる研究であると確信している。これからも他都道府県における全通併修の制度と運用を模範としながら、次の一歩を踏み出していきたいと考える。

第64回全国高等学校定時制通信制教頭・副校長会教育研究協議会千葉大会参加報告
第４分科会研究発表
北海道有朋高等学校　教頭　元村　治郎

日　時　　平成２５年７月２５日（木）
会　場　　ホテルポートプラざちば
題　目　　「三部制高校としての現状と課題」
発表者　　北海道有朋高等学校定時制課程教頭　元　村　治　郎

１　はじめに

（１）学校の概要

本校は北海道で唯一の「通信制課程」と「単位制による定時制課程」の二課程を併置する公立高等学校である。通信制課程では全道に約３，９００人の生徒が、実施校である本校と道内各地の３２の協力校で学んでいる。

また、単位制による定時制課程は、「学習歴や生活環境などが多様な生徒に対する幅広い高等学校教育の機会の確保を図るとともに、高等学校教育の多様化・弾力化に対応するため」のコンセプトにより整備された「単位制高等学校教育規程」に基づき、本道初の高等学校として、平成３年４月に開設された。

（２）本校単位制開設の経緯

○昭和62年　道教委が「高等学校定時制通信制教育の改善に関する検討会議」を設置。
○平成元年　道教委が「単位制課程設置検討委員会」を設置。
○平成２年　有朋高校に「単位制課程設置準備室」が設置される。
○平成３年　有朋高校に「単位制による定時制課程」が設置される。

（３）単位制の現状

①募集人員

区分	一　　般		転入・編入	合　計
学科	普通科	事務情報科	普通科	
人員	８０	８０	４０	２００

※推薦は一般の区分のうち
３０％（２４名）程度

②入学区分と在籍生徒数(平成25年5月1日現在)

学　科	普通科				事務情報			合計
区　分	推薦	一般	転編	小計	推薦	一般	小計	
１年次	1	76	3	80	0	62	62	142
２年次	0	69	11	80	0	55	55	135
３年次	0	58	6	64	0	23	23	87
４年次	0	32	1	33	1	13	14	47
合　計	1	234	22	257	1	153	154	411

２　本課程の取り組み　～単位制課程の主な特色～

（１）『無学年制と二学期制』

本課程の最大の長所は、生徒がそれぞれの興味・関心、過去の学習歴や進路希望等に応じてカリキュラムを自主編成できるところにある（大学での時間割自主編成とほぼ同じ）。

また、無学年制のため原級留置がなく、多様な履修形態を可能にし在籍期間も自分の単位修得計画に合わせて選択できる。生徒の精神的負担が少なくゆとりある学習が可能であることから、生徒からは好評である。

後期入学や前期・後期など半期での単位認定の仕組みは、他校で思うようにいかなかった生徒が本課程に入学してやり直す場合には必要不可欠なシステムである。

（２）『三部制』及び『１２時間開講』

授業時間帯は午前８時５０分から午後８時５５分までで、９０分授業を６校時展開している。生徒は自分のライフスタイルやカリキュラムに合わせて､好きな時間帯に授業を自由に選択し学習できるため、学べる時間を保障することになる。

所属部（Ⅰ部・Ⅱ部・Ⅲ部）は自分の作成した時間割によって決定される。生徒は各ＨＲに所属するが、固定した教室はなく、指定された教室でＬＨＲを行っている。

１校時	8:50～10:20
２校時	10:45～12:15
３校時	13:00～14:30
４校時	14:55～16:25
５校時	17:40～19:10
６校時	19:25～20:55

午前＝Ⅰ部
　Ⅰ部ＳＨＲ　10:30～10:40
午後＝Ⅱ部
　Ⅱ部ＳＨＲ　14:40～14:50
夜　＝Ⅲ部
　Ⅲ部ＳＨＲ　19:15～19:20

（３）時間割の『完全選択制』

本年度の講座開設数は延べ２９０を超える。生徒は学習指導要領の範囲内において、自由に科目登録をし、進路希望や習熟の度合いに合わせて自分に合ったカリキュラムを編成する。各人が反復履修をしたり、学び直しの科目を設定し、レベルにあった講座を選択する(完全習熟度別)ことで、学習の遅れを取り戻したり、受験対応科目や商業の専門科目が受けられる仕組みになっている。

☆科目登録（受講登録）について

①　各自が「科目登録」によって時間割を作成し、自分自身の進む道を決めていく。
②　その年度の時間割だけではなく、卒業までの時間割を作成するため、自分の進路や伸ばしたい教科についてよく考えて科目登録を進めていく必要がある。
③　毎年３月に、その１年の反省を行い、見直す作業をする。(「受講登録」 という)。
④　科目登録のため、教科・科目の学習内容を詳しく説明した「講座内容紹介」を作成している。
⑤　科目登録の要点
　・自分の個性を伸ばすために必要な科目は何か。
　・自分の進路を実現するために必要な科目は何か。
　・何年かけて卒業するのか。

（４）『登下校完全フレックスタイム制』

生徒は自分の授業時間に合わせて登下校する。空き時間も選択することができ、空き時間は図書室等で自習したり、ホールで歓談をしたり、外出したりして過ごす。自分自身で時間を管理する態度や能力が養われる。

☆卒業の認定の条件

①　必履修科目をすべての履修
②　７４単位以上の修得
③　総合的な学習の時間を３単位時間以上、特別活動３年分の履修
④　２学期以上の本課程在籍
⑤　本課程における８単位以上の修得

（５）『グリーンベルト』

総合的な学習や生徒会活動、委員会活動等の時間を保証するため、そして教職員の会議の時間の確保のために火曜日の４校時目、水曜日の４校時目には授業を入れていない。水曜日の３校時目はＬＨＲで、その後に引き続いて様々な活動ができるように工夫している。

（６）『学校外における学修の単位認定』と『定通併修（Ⅲ部生のみ）』

次のような単位認定もしており、多様な能力を評価している。

①単位認定（増加単位）

技能検査（英検・漢検・情報処理検定等）の成果、高校卒業程度認定試験、実務代替、高大連携等、本校以外で学んだ成果を条件に照らして単位として認定している。

②単通併修（定通併修）

Ⅲ部（夜間）在籍生には、Ⅲ部の時間帯だけで卒業可能できるように通信制との併修システムを活用した三修制も取り入れている。

③高等学校卒業程度認定試験

在籍中の科目合格によって、単位を認定する場合もある。

（７）教育相談や特別支援教育の機能

①サポート委員会

いじめられた経験のある生徒や不登校傾向にある生徒などの支援を行う。構成はⅡⅢ部教頭（委員長）、ⅠⅡ部教頭（副委員長）、Ⅰ・Ⅱ部保健部長、Ⅱ・Ⅲ部保健部長、養護教諭２名、Ⅰ・Ⅱ部進路指導部（就職担当）、Ⅰ・Ⅱ部生徒指導部、年次主任。

②スクールカウンセラー

道教委のスクールカウンセラー活用事業を活用して、スクールカウンセラーを配置している。相談日を設定し様々な経歴を持つ生徒に対してのサポートをしている。

③「高校生ステップアップ・プログラム事業」

道教委の行うこの事業の指定校となり、サポート委員会を中心に専門機関（北海道医療大学）と連携しながらコミュニケーションの向上を図り、望ましい人間関係づくりを進めるなどの活動を行っている。また、事業の推進に当たっては、北海道医療大学心理科学部学生の「臨床心理臨地実習」を兼ね、生徒のサポートをしている。

③特別支援パートナーティーチャー

道教委の事業である特別支援パートナーティーチャー派遣制度を利用して、特別支援学校等よりエキスパートを派遣してもらい、学習障害が疑われる生徒の支援を行っている。また、職員研修会の講師ともなっている。

④ＳＳＷ

北海道医療大学の先生がボランティアで、年間２０時間程度、経済状況や生活面で重大な困難を抱えた生徒や保護者、その担任からの相談を受けたり、関連機関との連携を指導していただいている。

（８）「校内学力検定」

就職試験０回受験者のなかに「合格する自信がない」というのが一つの理由であることから、「基礎学力向上や家庭学習の一助とすること」を目的に、進路指導部がスタートさせた。教員が就職用問題集などを参考とし問題を作成、希望者が家庭で解くことを基本とし、合格点（８５％）になるまで繰り返し取り組ませる。合格者には「合格証」を渡すなどして学びへの努力を称えることとしている。導入年度（２４年度）は、４～１級の問題を作成しており、３級を中心に１級まで延べ６９人が合格した（４級は受験者なし）。

（９）進路指導

①　卒業予定生には担任だけではなく、進路指導部の教員も生徒一人ひとりに対して担当を決め、きめ細かい指導をしている。

② 講習を設定し、進学のための受験を希望する生徒のニーズに応えている。
③ 職業観の育成や就職情報を得るためにハローワークやさっぽろ若者サポートステーション等の外部機関と連携しながら指導している。
④ 学校設定科目として「キャリア学習」を開講し、生徒のキャリア学習に対する様々なニーズに応えている。

(10) 入学者選抜
推薦・一般入選の他に、他校経験者のための転編入の枠を設け、多様な生徒を受け入れている。特に、生徒の学力を一元的な入試基準とせず、本課程独自の選抜基準をもとに、個々の秀でた能力を含めて総合的に評価する選抜を行っている。

(11) 科目履修制度
生涯学習の観点から地域に開かれた学校を目指して、また、一般社会人の多様な学習ニーズに応えるため例年１４０程の講座を開放している。ここ数年の受講数は実人数で３０名程度、延べ講座数で２５～６０講座、履修生の平均年齢は６０～６５歳で、近隣の方々が町内会の回覧を見ての申込や本校WEBページを見ての申込が多くなっている。
科目履修生の方々が本校生徒とともに受講することは、授業に対する取組や資格取得に対する意欲など、本校生徒に非常によい影響を与えている。
科目履修生の授業へのアンケートの結果からも、教職員や生徒への理解も深まることなどから非常に好評であることが分かる。

(12) 地域に根ざした学校づくり
校内ボランティア団体「有朋高校パトロール隊」を結成、地域の防犯活動（屯田地区防犯パトロール隊＝通称とんぼ隊）に積極的に参加し、地域の安全活動に貢献している。
また、学校周辺の通学路や公園等の清掃奉仕活動、老人施設等への訪問、除雪、児童会館の手伝い、その他福祉協議会から紹介されたボランティアの生徒派遣等を行っている。

３ 現状と課題

（１）時代の変化に対応した本校のあるべき姿の検討
① 本課程は開設以来２０年以上が経過し、この間、併設の通信制課程とも連携を図り、道内唯一の三部制高等学校として、「多様な学習ニーズを持つ生徒に対する高等学校教育の充実・提供」について一定の成果をあげ、高い評価を得ている。
しかし、全日制においても単位制が設置可能となり、本校の「完全単位制」に対して「進学型単位制」や「学び直しのための単位制」を標榜するなど、学校としての目指す方向を鮮明にした新しいタイプの高等学校としての単位制が広く認知されてきている。
また、立地も平成１９年に札幌市中心部から北区の郊外に移し、生徒の居住地域も変化してきた。
そのような新たな状況の中で、本課程の教育活動やその手法が現状の学習ニーズに対応しているのかについて検証し、「完全単位制」という特色が、生徒や保護者にとって今後も魅力ある存在としてあり続けるためには、本課程はどうあるべきなのかについて検討を深める必要がある。
また、自由な校風と科目登録、授業の遅刻、教科単位の修得放棄にみられる生徒のあきらめの早さに対する指導とのバランスを考えなくてはならない。

② 広報活動の拡充
ここ数年、受検生徒数が減少している状況に鑑み、地域に信頼され、魅力ある学校として選ばれる方策として、他の全日制普通科単位制高校との差別化を図る、職業学科（事務情報科）を持つ単位制であることをより強調しＰＲする、生徒指導や進路指導を充実させ、中学生や保護者、中学校への情報発信を工夫する、などの工夫の必要がある。また、北海道全域に対してもより広く認知されるよう情報発信することも必要である。

Ⅲ部は大きな特色として、夜間中心でありながら授業はどこでも選ぶことができる、職業学科がある、併修制度を活用して３年で卒業できることなどがある。これらを広く周知し、受検生を増加させるように工夫が必要である。

③　入学選抜方法の改善

受検生減少の一因として、他に単位制高校ができていることや立地の変化等があるが、入学選抜の日程が本校を第１志望にする生徒には不利な状況もあると考えられる。日程の変更等現在検討の必要がある。

☆平成２５年度入学者選抜

日　　程	全道公立校	有朋高校単位制
３月５日(火)	入学者選抜学力検査	
６日(水)	(多くの学校) 面接、(採点)	
７日(木)	(多くの学校) 採点	
１１日(月)		前期入試出願受付開始
１８日(月)	合格発表	
１９日(火)		前期入試出願受付終了
２２日(金)	２次募集受付	
２５日(月)	２次募集締切	前期転編入選日（学力・面接・作文・）
２６日(火)		前期転編入選合否判定会議
２７日(水)		前期一般入選日（面接・作文）
２８日(木)	２次募集合格発表	前期一般入選合否判定会議
２９日(金)		前期転編・一般合格発表

（２）新たなニーズに対応できるシステムの構築

サポート委員会の設置、ＳＣ・ＳＷＷの配置、特別支援パートナーティーチャー派遣制度の利用、ステップアッププログラムの活用など、特別な支援を必要とする生徒への対応がここ数年飛躍的に増えたが、さらに必要となる生徒が増えることも考えられ、校内体制の整備、予算の配分等検討が必要である。

（３）学びの「質保証」に関する取組の検討

授業料無償化や就学支援金制度の創設など社会全体の負担により生徒の学びが支えられていると認識が広まり、高等学校教育の成果が、今まで以上に「質の保証」という観点において問われる状況になっている。卒業させるだけではなく、学習指導要領や地域や生徒の実態に基づいて、目指すべき目標を設定し、その達成状況を評価・公表し、適切な説明責任を果たす必要がある。そのためには、学習や能力向上の状況、実生活で直面する課題に対する知識・技能の活用力などをより正確に測る評価方法の構築を目指す必要がある。

（４）効果的な職員研修

本課程では固定時間割のため、教員が学期中に研修等のため学校を空けづらい。年間の日程をさらに研究して、効果的な授業、研修ができる体制を構築することが急務である。

Ⅳ　おわりに

本校定時制課程の開設から２０年以上が経過した。この間、併設の通信制課程とも連携を図り、生徒個々の生活パターンに合わせた履修を可能にするなど教育課程の弾力化に努め、多様な学習ニーズを持つ生徒に対する高等学校教育の機会の充実に努めてきた。

しかし、近年の急激な社会情勢の変化や受検生の減少の中で、定時制高校で学ぶ生徒の実態も変化しつつある。本校単位制課程開設当時のコンセプトを守りつつも、多様な生徒への対応、キャリア教育の充実、学習指導や生徒指導の在り方等、時代の変化に対応した学校経営のあり方をさらに模索していきたい。

第64回全国高等学校定時制通信制教育振興会大会研究協議会（広島大会）報告

北海道札幌北高等学校　教頭　村端　　悟

平成２５年８月８日（木）～９日（金）の２日間にわたり広島市の「メルパルク広島」を会場として、「ひろしまの地でひとの尊厳と絆の大切さを確かめ合おう」を大会テーマとし、「柔軟な教育システムとしての定通教育の新たな可能性を切り拓く」を研究協議テーマとして開催されました。

【大会１日目】８月８日（木）

午前中の理事会・評議員会および各県代表者会議では、平成２４年度会務並びに事業報告、平成２４年度収支計算書・補助事業他決算書、貸借対照表・財産目録等・監査報告、２５年度事業目標・事業方針・事業計画・予算書が承認されました。

午後からの開会式では島村宜伸会長から主催者挨拶、続いて下村博文文部科学大臣（代読）、田村憲久厚生労働大臣(代読)、城納一昭広島県副知事、下崎邦明広島県教育委員会教育長から来賓の挨拶、松井一實広島市長から歓迎の挨拶がありました。

開会式に引き続いての総会では、前年度開催地（高知県）会長、今年度開催地（広島県）会長および次年次開催地（滋賀県）会長からなる議長団により、議事が進行されました。

総会後の講演会では、公立大学法人県立広島大学教育センター教授　山根英幸氏による「挫折と成長」と題した講演が行われました。ロータリーエンジンを開発したマツダの再生を題材に多方面にわたる示唆に富んだ講演をしていただきました。

研究協議Ⅰ・Ⅱでは「定時制・通信制教育の現状と課題」、「多様なニーズに応える定通教育を支える定通教育振興会の役割」についての提案を受けて研究協議が行われました。

【大会２日目】

研究協議Ⅲ・Ⅳでは「群馬県における定通制高校の転入学・編入学の現状」、「定通における特別支援教育の推進について」の２つの提案を受けて研究協議が行われ、文科省の清原洋一視学官から指導助言をいただきました。

文科省、厚労省に関する質問要望事項への回答の後、大会宣言決議文の朗読・採択が行われ、２日間の大会日程を無事終了しました。

第61回全国高等学校定時制通信制生徒生活体験発表大会参加報告

北海道札幌琴似工業高等学校 教頭　盛田　典男

平成２５年１１月２４日（日）、東京港区六本木ヒルズのハリウッドプラザにおいて、第６１回全国高等学校定時制通信制生徒生活体験発表大会が開催されました。北海道からは本校電気科３年生の三木夏恵さんと室蘭栄高等学校２年生の横田侑花さんの２名が出場し、三木夏恵さんは最優秀賞の文部科学大臣賞を受賞、横田侑花さんは大会長奨励賞を受賞しました。本校は昨年の町田亜実さんに引き続き、２年連続文部科学大臣賞受賞を果たしたことになります。

この大会は、全国の定時制・通信制高等学校に学ぶ生徒が、学校生活を通して、感じ、学んだ貴重な体験を発表し、多くの人々に感動と励ましを与えることを目的とするもので、歴史が深く、今年度で61回目を数えます。

全国から集まった５８名の生徒が５会場に分かれて発表し、各会場より３名を選出。午後から決勝大会というべき全体発表が始まります。

三木さんは全体発表に進出、「その先にあるもの」と題し、小学校時代に右手の障がいをからかわれて自分自身を嫌い、親を恨んだこと。高校に入り自分を変えるきっかけとなった演劇部での体験を発表。舞台に立って演技でほめられたこと、何にでも挑戦し前向きに生きること、ありのままの自分を受け入れてくれる高校生活について語り、最優秀賞である文部科学大臣賞に輝きました。

横田さんは「助けられながら」と題して、HR委員になった体験を発表。クラスをまとめる難しさからイライラして委員を投げだそうと思ったが、クラスメイトや先輩、先生方や家族に助けらて続けられたと語り、「前向きに、一日一日がかけがえのないものになるような高校生活を送りたいです。」と結んだ。

上位入賞者はＮＨＫ第２ラジオ放送で全文紹介されました。

★地区だより
石狩地区定時制教育の活動状況
北海道高等学校教頭・副校長会定通部会
石狩地区長
北海道札幌西高等学校　教頭　加澤　雅裕

(1) 石狩地区の概況

北海道高等学校教頭・副校長会定通部会石狩地区は、現在、道立高校11校、札幌市立高校１校の12校16名の会員による構成である。北海道高等学校長協会定通部会、石狩支部校長会並びに北海道教頭・副校長会石狩支部の御指導・御支援をいただきながら、北海道高等学校教頭・副校長会定通部会の下部組織として、自主的・自立的に組織運営を進めている。特に、定時制通信制高等学校の管理運営及び教育活動に関する研究協議を通して、課題解決に向けた取組や定通教育の振興に努めるとともに、教頭・副校長としての学校運営に関する指導力の向上を図っており、また、研究協議会の実施時期、内容等について見直しを行っている。

(2) 現在の活動

石狩地区における研究協議会は、平成23年度までは年４回、平成24年度は年３回（４月・７月・２月）の実施であった。今年度の研究協議会については、公費・私費の負担軽減を図る観点もあり、年２回（４月・２月）の開催とし、さまざまな他の研究協議会等の機会を活用して積極的に情報交換等を行うこととした。今年度の議題等は次のとおりである。

○第１回研究協議会
（定通体連石狩支部春季理事総会と同日）
役員選出、事業計画、関連事業計画、全道教頭・副校長会定通部会・研究協議会準備、定通部会石狩地区各種当番校・事務局校の確認、定通関係諸行事・会議等の確認、情報交換、北海道教育庁高校教育課及び石狩教育局からの指導・助言等

○第２回研究協議会
（石狩地区高等学校定時制通信制教育振興会理事会・研究協議会と同日）
事業中間報告、次年度事業計画案、全国定時制通信制教頭・副校長協会全国常任理事研究協議会報告北海道高等学校・副校長会定通部会「会報」の編集作業状況報告、情報交換、北海道教育庁石狩教育局からの指導・助言等

本部会の活動のほか、石狩地区の定時制通信制の学校や副校長・教頭は、定通体連、高等学校定時制通信制教育振興会、生徒生活体験発表大会、給食研究協議会など、地区や全道の事務局や当番校を持ち回りで担当しており、また、全道・全国の役員を兼務することも多い状況である。研究協議会では、石狩地区の横のつながりや交流を深めるための情報交換を積極的に行うとともに、定時制通信制を取り巻く様々な課題について他の都府県や全道の実践等を基にした研究協議を行い、学校運営に関する指導力の向上を図っている。

★地区だより
日勝地区定時制教育の活動状況
北海道高等学校教頭・副校長会定通部会
日勝地区長
北海道帯広柏葉高等学校　教頭　印牧　誠

日勝地区の概況

日勝地区の定通部会は昼間定時が音更高校、帯広農業高校の２校で、夜間定時が日高高校、帯広柏葉高校の２校で合計４校で運営されている。 毎年５月末に定通体連大会、８月末に生活体験発表大会が行われている。また日勝地区には定時制通信制教育振興会があり、平成２５年度から星槎学園帯広キャンパス校も加入し、２年前から定通体連の大会にも参加している。

次に各学校の教育活動について報告する。

(1) 音更高校

本校は昼間定時制課程農業科１間口と全日制課程普通科４間口との併置校である。農業科は昭和25年帯広柏葉音更分校として開校し、創立６３年となる。しかし、平成27年度に募集停止が決定し、その歴史を閉じることとなった。

現在は、３修制を導入し、日課や行事も全日制普通科と全て共に活動している。

農業科生徒数は５８名在籍しており、部活動も高体連もしくは定体連のいずれかに所属し、出場している。

教職員は「積極的な生徒指導」「個に応じた学習支援及び進路指導」から生徒理解を深め、個々の基礎学力向上に取り組んでいる。

今年度は「家庭学習の定着」をテーマに、週末及び長期休業中学習課題作成やベネッセの「マナトレ」を導入し、課題解決に力を入れている。

農業教育の面では、実学とコミュニケーションをとおして、人間力を育む活動を推進している。

全ては「生徒一人一人のために」

(2) 帯広農業高校

本校は、昭和２５年４月、季節定時制としてスタートした。当時は十勝の中心的産業である「農業」を支えるために、各地に季節定時制農業高校がつくられた。今日では、後継者育成という役割は全日制農業高校が担うようになり、発足当初の「働きながら学ぶ生徒を応援するための学校」から、「働くためのさまざまな力を育む学校」として、ますます地域からの期待が高まっている。

本校の特徴は、様々な体験学習を教育の柱にして、「働くことを通して社会参加できる生徒」を育てる４年制高校である。卒業後の職業生活を実現させるために、はじめの３年間で働くために必要な「心」「からだ」、「知識」と「技術」を磨く。

また、農業クラブ活動、定通体連（卓球・羽球）・定文連（生活体験発表大会）の各種大会で優秀な成績をあげている。その他に、帯広養護学校・帯広けいせい苑等の交流活動、一年次での農業体験実習、二年次での農家委託実習、三年次企業体験学習及び生徒の進路実現等で地域のご応援をいただきながらより一層の充実を図るべく実践している。

(3) 日高高校

本校は昭和２４年に静内農業高校日高分校として開校した町立高校である。昭和６１年、昼間はスキーを中心としたスポーツ全般やアウトドア活動などの体験学習を行い、夜間は日高高校で学ぶという産業学習制度を発足させ、高校存続と町の活性化を目指した。さらに平成１５年、産業学習制度を学校外の学修として単位認定し、３年間で卒業できる修業年限３年制を取り入れた。その後平成２０年には多様な進路希望に沿った科目受講を可能にするため産業学習制度内にコース制を導入、平成２５年のコース再編を経て、現在はスキーアスリートコース、キャリアデザインコースの２コース制となっている。

生徒は日高町以外の道内、道外出身者が大半を占め、寮生活を送っている。更に中学時に不登校傾向にあった生徒等も在籍しており、基礎基本の定着、生活習慣の確立、人間関係構築に課題や悩みを抱えている生徒が多い。これらの課題の解決のために町教育委員会と高校が緊密な連携を図り、個々の生徒に応じた教育活動を展開している。

(4) 帯広柏葉高校

本校は今年度全日制90周年、定時制60周年を迎えた。十勝管内では唯一の夜間定時制高校である。来年度入学生より、有朋高校との定通併修による三修制の導入が決定している。

現在、在籍生徒数は３９名で、数年前と比較すると激減しているが、生徒会役員を中心に、学校祭など各種学校行事において、皆主体的に楽しく参加している。

１２月実施の保護者アンケートでも、「子どもを入学させてよかったと思う」の設問に、よく当てはまる６９％、だいたい当てはまる３１％であった。

今後も、本校が夜間定時制高校として、果たす役割は大きいと確信する。

★地区だより
後志地区定時制教育の活動状況
北海道高等学校教頭・副校長会定通部会
後志地区長
北海道ニセコ高等学校　教頭　三浦治彦

(1)後志地区の概況

後志地区は、小樽地区に夜間定時制高校３校、通信制高校１校、羊蹄山ろく地区に昼間定時制高校３校の７校で組織されている。

設置者別なら道立３校、町立１校、村立２校、私立１校となっており、学科別なら普通科１校、商業科１校、工業科１校、農業科３校、通信科１校となっている。

昭和２３年に設置された歴史ある小樽商業高校定時制課程が、惜しまれながら平成２６年３月をもって閉課することが決まっており、平成２６年度の北海道高等学校教頭・副校長会定通部会後志地区は、６校の構成となる。

(2)後志地区事業「定体連後志地区大会」

６月１日(土)に、ニセコ町民センター(男女バレーボール)、小樽潮陵高校(男女バスケットボール)、小樽工業高校(男女バドミントン)、留寿都高校(卓球)を会場に地区大会が開催された。

地区大会代表となった個人・団体チームは、全道大会でも力を発揮した。全国大会に出場した女子バレーボールは、後志管内から２チーム(真狩高校・ニセコ高校)あり、真狩高校は３回戦進出、ニセコ高校は全国３位という結果を残した。

(3)後志地区事業「生活体験発表大会」

９月２６日(木)に、小樽工業高校を会場に地区大会が実施された。校内選抜を勝ち抜いた学校代表６名が熱い発表をおこなった。「目的を持って生きることの大切さ」について発表したニセコ高校２年生が優勝し、全道大会での発表の機会を得た。

(4)小樽潮陵高等学校(夜・普通)

昭和１６年の定時制課程創立時より、「ゆっくり学び自立を目指す」のもと、個に応じたきめ細やかな指導、ゆとりある学びと自主性の育成を図ってきた。平成２６年度入学生からは通信制を併用した「三修制」もスタートする。

(5)小樽工業高等学校(夜・工業)

電気・建築科を持つ、働きながら勉強したいという人のための夜間定時制工業高校として多くの人材を輩出している。

高等学校を卒業した社会人を対象とした社会人入学制度により、幅広い年齢層の方々が在籍している。

(6)小樽商業高等学校(夜・商業)

「自分らしさ」を大切にし、「ゆっくりしっかり学習したい」に答えるきめ細やかな指導をおこなってきた小樽商業高等学校も４年生４名の卒業をもって長い歴史に幕を引くことになった。

(7)ニセコ高等学校(昼・農業)

ニセコの農業・農村そして大自然が秘める教育力を活用して、新しい時代を担う農業経営者と、緑を大切にする新しい観光産業人を養成することを目標とした、全国で唯一の「緑地観光科」を設置している。ＹＴＬホテルグループと連携協定を締結しており、海外等での研修も充実している。

(8)真狩高等学校(昼・農業)

平成２５年度より「有機農業コース」、「野菜製菓コース」の新コースを開設した。

長期休業中に専門学校へ通う「ダブルスクール」、製菓衛生師の「国家資格受験資格」の取得、「有機農業」の知識・技術の習得などスペシャリストを育成するカリキュラムは注目を集めている。

(9)留寿都高等学校(昼・農業)

平成６年に全国唯一の「農業福祉科」に学科転換し、平成２１年には北海道の公立高校では３校しかない、介護福祉士国家試験が受験可能な「福祉系高等学校」に指定されている。介護福祉士国家試験、８年連続合格率１００％を達成している。

(10)双葉高等学校(通信)

平成１７年に開設し、「いのちの教育」「心の教育」を礎に、多様なニーズに応えた学びの場を提供している。

調査研究部報告

北海道高等学校教頭・副校長会定通部会
調査研究部長
北海道札幌東高等学校　教頭　清水　公久

今年度の調査研究は、「防災避難設備と防災避難訓練の現状について」をテーマとしました。1995年の阪神淡路大震災、2011年の東日本大震災等多発する災害とそれに伴う危機意識はこれまで以上に高まり、学校現場での危機管理についても以前にも増して注目を集めているところであります。今回は、今までの定時制通信制教育の防災避難訓練上の実態を調査研究し、今後の課題を整理するということを調査の目的としました。

調査研究は、20項目のアンケートを実施することにより各校の実態を調査分析しました。また自由記載を各校の抱える現状課題を調査する目的で行いました。実態の概要と各校の課題より共通する問題を整理し、それぞれの学校に応じた活用をしていただくことができればと考えています。

今回の反省点としては、①調査項目をもう少し整理する、②夜間定時制だからこそ必要となる情報を数多く収集する、③情報を焦点化し共通課題とする、以上が不充分であったと思います。

調査方法等は以下のとおりです。

(1)調査対象:北海道高等学校教頭・副校長会
定通部会加盟高等学校の45校
(2)調査時期:平成25年9月27日(金)～10月18日(金)
(3)回答者:教頭、副校長
(4)回答者数:38名

調査研究の詳細については、平成25年度「会誌」(北海道等学校教頭・副校長会)をご一読いただき、日々の教育活動にご活用いただけましたら幸いです。

調査研究部長　清水　公久（札幌東高等学校）
調査研究部員　北村　京一（札幌南高等学校）
小島　政裕（江別高等学校）
坂本　浩哉（恵庭南高等学校）

北海道高等学校定時制通信制体育大会報告

北海道高等学校定時制通信制体育連盟事務局長
市立札幌大通高等学校　教頭　佐藤昌弘

平成２５年度の事業につきましては、関係各位のご理解とご協力により、すべて滞りなく終えることができました。各支部、各種目専門部におかれましては、春の支部大会に始まり北海道大会、秋季新人戦まで円滑に運営していただき、改めて心より感謝申し上げます。

今年度の北海道大会及び全国大会の成績につきましては、事務局（市立札幌大通高等学校）のWebｻｲﾄ(http://www.odori-h.sapporo-c.ed.jp/teitairem/)に掲載しておりますので、ご参照ください。特に、全国大会でのバレーボール女子3位ニセコ高校（ベスト6プレーヤー三条さん）卓球男子準優勝クラーク高校や卓球女子準優勝市立札幌大通高校など、上位入賞の他にも、様々な種目で活躍を見せてくれました。

全道大会の当番支部のローテーションにつきまして、各支部では生徒数が減少し、それに伴う教員数の減少、さらに今後統廃合がさらに進めば大会の運営が困難な状況も本年度の調査の結果より、理解できました。しかし、それぞれの支部で、事情を抱えおり、簡単には変更できない状況にあります。

一昨年末にありました大阪での体罰の問題は様々な種目でも発覚し、スポーツ界全体に警笛を発し、本年度は、学校内の部活動の指導を巡って研究協議会や講習会などで、指導に対して注意・喚起する機会が多い年でもありました。

定通部の大会では発足以来、記録や勝敗にこだわるだけのスポーツの祭典ではなく、困難な環境から満足のいく練習ができなくともスポーツを愛する心や、自己のレベルに合わせた目標に向かって挑戦することと、お互いの健闘をたたえあうことを標榜してきました。再度、各校で顧問へのご指導をよろしくお願い申し上げます。

第57回北海道高等学校定時制通信制生徒生活体験発表大会報告

北海道有朋高等学校　教頭　太　田　倫　夫

第57回北海道高等学校定時制通信制生徒生活体験発表大会は10月16日（水）に札幌市教育文化会館において開催されました。前日から続く全道的な悪天候により、大会の実施が危ぶまれましたが、関係各位の多大なるご指導とご協力・ご支援により、予定どおり開催し、無事終了することができました。大会運営の当番校として心から感謝申し上げます。

発表は全道９地区の定時制高等学校の代表10名と通信制高等学校の代表１名の合計11名により行われました。勉強や生徒会・部活動などの学校活動に積極的に関わったり、仕事やボランティアなどの学校外の活動を経験することで自分自身が大きく変わったこと、家族や先生方、仲間や先輩に支えられながら障害や困難を乗り越えてきたこと、将来に向けた目標を持つことで様々なことに積極的に挑戦していることなど、前向きに生きようとする強い意志と決意が表れていました。代表生徒の発表内容と発表態度は、参観していた石狩管内の定時制・通信制の生徒の皆さんのみならず、ご来賓をはじめ多くの聴衆の皆様にも大きな感動を与えてくれました。

発表と閉会式の間のアトラクションでは札幌市在住の音楽家四名による歌とピアノのコンサートが行われました。身近な曲目を中心にすばらしい歌声と演奏を披露していただき、それまでの緊張から一転して和やかな雰囲気となり、会場全体で楽しむことができました。

審査は全国大会の審査基準に準じ、審査委員長である北海道札幌琴似工業高等学校長廣瀬覚様をはじめ６名の審査委員により発表内容・発表方法について慎重に審査をしていただき、北海道代表として北海道札幌琴似工業高等学校、北海道室蘭栄高等学校の２名の生徒を選出しました。全国大会ではその力を充分に発揮し、札幌琴似工業高校の生徒が文部科学大臣賞を受賞いたしました。

本大会の発表内容等については、記録集「輝く青春第47集に掲載されています。学校関係者以外の方々にもご覧いただき、定時制通信制課程の高等学校に通学する生徒達についてご理解を深めていただきますようお願い申し上げ、報告といたします。

審査結果

○最優秀賞
　札幌琴似工業高等学校３年　三木　夏恵
　「その先にみえるもの」

○優秀賞
　室蘭栄高等学校２年　横田　侑花
　「助けられながら」

○優秀賞
　市立札幌大通高等学校４年　澁谷　佳菜子
　「明日は誰のものか」

○奨励賞
　函館中部高等学校４年　中條　こゆき
　「幸せの形」

○奨励賞
　網走南ヶ丘高等学校２年　岡﨑　里恵
　「成長・そして目標」

○奨励賞
　帯広農業高等学校４年　岩佐　静和
　「色々な経験を得て」

第45回北海道高等学校給食研究協議会北海道大会報告

北海道札幌北高等学校　教頭　村端　　悟

本年度の第４５回北海道高等学校給食研究協議会北海道大会を開催するにあたり、より多くの方々に出席いただけるようにと、長期休業中に開催日を設定しました。その結果、北海道札幌北高等学校を会場として平成２５年７月３０日（火）に開催されました。「意欲的な生活態度を育む学校給食の在り方」を研究主題として、昨年度より４校17名多い26校67名の参加を得て講演・研究協議を実施しました。

北海道大会に先立って行われた理事総会・研究協議会では、平成２５年度会務中間報告・会計中間報告、役員構成について審議了承されるとともに、「大会集録」については、開催要項・大会資料等を札幌北高定時制のホームページに掲載することをもって代えることとなりました。

開会式では、北海道札幌北高等学校長の中田貢北海道高等学校給食研究協議会長からの主催者挨拶の後、北海道教育庁学校教育局健康・体育課 田中宜行課長から来賓挨拶がありました。その後、札幌北高定時制に在籍（３年生まで）したことのある漫画家　魚戸おさむ氏より、『漫画で考える“食べる”ということ～僕は札幌北高定時制の生徒でした～』と題して講演がありました。ビデオや写真、漫画をふんだんに使った講演で、「食」についてあらためて考えさせられたとても有意義な内容で、参加者一同熱心に耳を傾け「感動」を覚えるものでした。

午後は、北海道苫小牧東高等学校の原田壽之教頭から「北海道苫小牧東高等学校定時制課程における学校給食充実の現状と課題」と題して研究発表があり、引き続いて研究協議に入りました。研究協議は北海道稚内高等学校の南俊明教頭と北海道釧路湖陵高等学校の伊藤浩次教頭の司会で進められ、参加各校から現状と課題についての報告が行われました。

研究協議の終わりに当たり、北海道教育庁学校教育局健康・体育課学校給食グループ主幹　本間美恵子氏から指導助言をいただき、大会日程を終了しました。

退職にあたって

北海道札幌北高等学校　教頭　村端　　悟

定通部会に所属する年限が限られる今の状況からして、様々な解決すべき課題があることを認識していながらなかなかうまくいかないのが実情です。

石狩地区教育振興会の事務局を担当し、様々な課題解決に向かおうとしましたが道半ばでした。少し悔いが残ります。全道給食研の事務局についてはここ２年間でいくつかの問題に整理をつけることができ、一安心です。

大変お世話になりました。ありがとうございます。４月からのんびりします。

退職にあたって

北海道札幌月寒高等学校　教頭　伊藤　芳明

普通はあり得ない同じ高校の全日制から、定時制に赴任して3年間お世話になりました。特に、23 年度には全道の生活体験発表大会当番校、24・25 年年度には定通体連石狩支部の事務局校として何とか勤めることがでいましたのも、皆様のお陰と感謝いたしております。今の心境をかっこつけて言わせてもらえば、W. B. Yeats の言葉から、

Cast a cold eye　　生にも死にも
On life, on death.　　冷たい視線を投げかけて
Horseman, pass by!　騎士は去りゆくのみ

退職にあたって

北海道室蘭栄高等学校　教頭　伊藤 博史

教頭として、室蘭工業高校定時制に２年、そして最後の赴任地として室蘭栄高等学校定時制に３年計５年間定時制教育に携わることができました。

この室蘭は私の生まれ育った土地でもあり、一番の青春を謳歌させていただいた町でもあります。また、最後の職場として私が高校時代にお世話になった先生方に非常勤講師として、最後まで面倒を見ていただきましたことは人生の縁を感じる次第です。ここに、教職の幕を下ろすことが出来るのも皆様方のお陰と感謝申し上げ、御挨拶と致します。

平成２６年度定通部会 事業計画（案）

● **北海道の事業計画**

No.	事業計画	期日	会場
1	◆北海道高等学校教頭・副校長会定通部会理事会 総会・研究協議会	平成26年 5月14日（水）	ホテルライフォート札幌
2	◆北海道高等学校定時制通信制体育連盟幹事会	5月14日（水）	ホテルライフォート札幌
3	◆北海道高等学校定時制通信制教育振興会総会・ 研究協議会	6月 2日（月）	ホテルライフォート札幌
4	◆第46回北海道高等学校給食研究協議会北海道大会	8月未定	札幌琴似工業高校
5	◆第58回北海道高等学校定時制通信制生徒生活体験 発表大会	10月15日（水）	札幌教育文化会館
6	◆平成26年度調査研究部報告（『会誌』掲載）	平成27年 3月上旬	

● **全国の事業計画**

No.	事業計画	期日	会場
1	◆東北・北海道地区高等学校通信制教育研究会 校長並びに教頭・副校長研究協議会	平成26年 5月 8日（木） ～ 9日（金）	ウエディングプラザアラスカ（青森市）
2	◆全国高等学校定時制通信制教頭・副校長協会 第1回全国常任理事研究協議会（全教協理事研）	5月30日（金）	国立オリンピック青少年センター （東京都）
3	◆第66回全国高等学校通信制教育研究会総会 並びに研究協議会（全通研大会）	6月12日（木） ～13日（金）	国立オリンピック青少年センター （東京都）
4	◆第65回全国高等学校定時制通信制教頭・副校 長協会 総会・教育研究協議会（全教協大会）	7月31日（木） ～8月 1日（金）	高知県民文化ホール
5	◆全国高等学校給食研究協議会　理事会・総会	8月 4日（月） ～ 5日（火）	東京都学校給食会館
6	◆第65回全国高等学校定時制通信制教育振興会 大会（全振大会）	8月 7日（木） ～ 8日（金）	ロイヤルオークラホテル（大津市）
7	◆東北・北海道地区高等学校通信制教育研究会 総会並びに研究協議会（地区通研大会）	10月30日（木） ～31日（金）	ホテル東日本盛岡
8	◆第62回全国高等学校定時制通信制生徒生活体験 発表大会	11月23日（日）	六本木ヒルズハリウットプラザ （東京都）
9	◆東北・北海道地区高等学校通信制教育研究会 教頭・副校長研究協議会	12月11日（木） ～12日（金）	小樽市
10	◆全国高等学校定時制通信制教頭・副校長協会 第2回全国常任理事研究協議会（全教協理事研）	12月12日（金）	国立オリンピック青少年センター （東京都）

≪編　集　後　記≫

定通部会における業務についてご理解・ご協力いただきありがとうございます。おかげをもちまして、本年度の「会報」も無事発行の運びとなりました。

編集発行にあたり、ご校務ご多用の中ご執筆いただきました校長協会定通部会長の村田校長先生をはじめ、全道の副校長・教頭先生、そしてＷＥＢ更新にあたりご協力いただきました、北海道有朋高校の諸先生方にあらためて感謝申し上げ、編集終了のあいさつとさせていただきます。　［ 恵庭南高等学校　坂本　浩哉 ］